



神戸大学における授業形態の多様化に対応した教育支援コンテンツの構築

大山, 牧子
前川, 桐子

(Citation)

大學教育研究, 34:107-119

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503424>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503424>



神戸大学における授業形態の多様化に対応した 教育支援コンテンツの構築

Development of the Teaching-Support Content Addressing the Diversification of Instructional Modalities at Kobe University

大山 牧子 (神戸大学 大学教育研究センター 准教授) / OYAMA, Makiko

前川 桐子 (神戸大学 大学院医学研究科 博士後期課程/
大学教育研究センター リサーチ・アシスタント) / MAEKAWA, Kiriko

要旨

本稿では、神戸大学で設定される授業形態に基づき、対面・ハイブリッド・遠隔の三形態の比較可能性を高める教育支援コンテンツを構築し、その構成を報告する。ポストコロナ期の大学教育では、対面・ハイブリッド・遠隔の各授業形態が併存し、教員は授業目的や学生の学習状況に応じて柔軟に授業形態を選択することが求められている。一方で、神戸大学において、これらの授業形態の特徴や実践上の留意点、設計のポイントを体系的に比較し、授業改善に活用できる形で提示した資料は十分に整備されていない。そこで本稿では、神戸大学の授業実践および学内の調査研究（授業振り返りアンケート、BYOD 実態調査など）を基盤に、授業形態ごとの特性と課題を整理した。さらに、授業デザイン・授業実施・学習者支援・学習経験の観点から、対面・ハイブリッド・遠隔の特徴を対照的に示し、それぞれに適した授業デザインのポイントや ICT 活用の具体例を Web で構築した。本コンテンツは、各授業形態の比較可能性と参照性を高め、教員が自らの授業に適した設計判断を行うための参考として機能することを目指す。本稿では、web コンテンツの抜粋を示す。

1. はじめに

ポストコロナ期の大学教育において、授業形態は急速に多様化している。対面授業を基盤としつつ、オンライン授業やハイブリッド授業が選択肢として定着し、教員には学習目的や学生の学習状況に応じて複数の授業形態を組み合わせた授業デザインが求められている。このような変化に関しては、新型コロナウイルス感染症への緊急的対応として実施されたオンライン授業と、計画的に設計されたオンライン教育とを区別して捉える必要性が指摘されている (Hodges et al., 2020)。神戸大学においても、2022 年に授業形態の定義が整理され、対面・ハイブリッド・遠隔の三形態が公式に運用されている。一方で、授業形態の選択肢が広がる中で、「どの授業形態がどの学習目的に適しているのか」「各授業形態における設計や運営のポイントは何か」といった情報は、必ずしも十分に共有されていると

はいえない。

これまで神戸大学におけるオンライン授業については、学生の振り返りアンケートを用いて、オンライン授業の学習経験の特徴を明らかにする研究が蓄積されてきた（長崎・大山、2025；大山、2024）。これらの研究により、オンライン授業が学生にどのように捉えられているのかについては、一定の知見が得られている。

しかし、こうした分析結果を踏まえ、教員が授業形態をどのような観点から選択し、どのように授業をデザインすればよいのかについては、神戸大学において体系的に整理された知見は依然として限られている。対面・ハイブリッド・遠隔の三形態は、単なる「場所の違い」ではなく、相互作用の様態、学習者の学習方法、ICT 活用の方法、授業の構造化など、複数の観点から特徴づけられるものであり、教員が授業デザイン時に参照できる形で整理・提示することが求められている。

そこで本稿では、神戸大学における授業形態に基づき、対面・ハイブリッド・遠隔の三形態の比較可能性を高める教育支援コンテンツを構築し、その内容を報告する。本コンテンツは、授業形態の定義、学習者の理解度・達成度・学修時間の傾向、授業デザインの視点、ICT 活用の方法等を整理し、Web 上で提供するものである。これにより、教員が授業形態を選択する際の材料を提供し、大学教育における学びの質保証や授業改善を支援することを目的とする（文部科学省、2011）。

なお、本稿は web による教育支援コンテンツの抜粋を扱うため、可読性に配慮して教育支援コンテンツ部分（第2章）に「ですます調」の表現を含んでいる。また、紙幅の関係上、コンテンツの抜粋バージョンであることを了承いただきたい。そのようなことがわかるようにするために、第2章は四角で囲むこととする。

2. 教育支援コンテンツの内容

2.1. 授業の多様化と学びの質保証

本稿では、神戸大学における授業形態の定義に基づき、授業を対面、ハイブリッド、遠隔の三形態に区分します。これら三形態は、授業を実施する場所の違いだけでなく、学習者間および教員との相互作用の様態、ICT 活用の位置づけ、授業構造の設計といった観点から特徴づけられます。

2.1.1. 大学教育の変化と授業の多様化

ポストコロナ期の大学教育においては、学習者の多様な状況やニーズに対応するため、授業形態が大きく変化しています。神戸大学でも、対面授業を基本としつつ、ハイブリッドや遠隔など、ICT を活用した多様な学習環境が展開されています。これら授業形態の多様化は、柔軟な学びを可能にする一方で、どのようにすれば学びの質を確保できるかという新たな課題を生み出しています。

本コンテンツでは、神戸大学の授業実践と調査研究をもとに、各授業形態に適した授業

表 1 神戸大学教養教育院における授業形態の区分

大学設置 基準	神戸大学の シラバス表記	定義
対面	対面	全ての授業を対面で実施する
	ハイブリッド (対面)	授業回数の半数以下（クオータ制の場合は 3.5 回以下、 セメスター制の場合は 7 回以下）を遠隔授業とする授業
オン ライン	ハイブリッド (遠隔)	授業回数の半数を超えて（クオータ制の場合は 4 回以上、 セメスター制の場合は 8 回以上）遠隔授業とする授業
	遠隔	全ての授業を遠隔（原則オンデマンド）で実施する

出所：神戸大学教養教育院資料をもとに作成

デザインの知見を整理し、教員が授業デザインに活用できる参考資料を紹介します。

2.1.2. 神戸大学における授業形態の定義と現状

神戸大学（教養教育院）、における授業形態の区分を表 1 に示します。この 3 つの形式を導入し、「対面の臨場感」と「オンラインの柔軟性」を両立させる授業が多く実施されています。2023 年時点では、各授業形態の実施数は【対面 4189、ハイブリッド 526（対面 480・遠隔 46）、遠隔 159】のようになっています。

2.1.3. 学生調査による授業形態ごとの神戸大学生の理解の現状

学びの質を保証するためには、いずれの授業形態でも学生が一定の理解を得られる必要があります。神戸大学生はどうでしょうか。図 1～図 3 は、神戸大学における全授業科目の授業振り返りアンケート結果を基に、授業形態別の理解度、到達目標達成度、自己学修時間を示したものです（長崎・大山、2025）。理解度および到達目標達成度については、対面授業とハイブリッド授業で概ね同等の傾向が見られる一方、遠隔授業ではやや低い傾向が確認されました。一方、自己学修時間は、遠隔、ハイブリッド、対面の順に長くなる傾向が見られました。

これらの結果から、授業形態そのものが学習の質を一義的に規定するのではなく、各授業形態の特性を踏まえた授業デザインや学習支援の在り方が、学生の学習経験に影響している可能性が示唆されます。オンラインを用いた授業は、学生にとって「柔軟に学べる」メリットがある一方で、十分に理解できる授業デザインになっているかどうかを今一度確認する必要があります。

2.1.4. 各授業形態の特徴

各授業形態の特徴を踏まえた上で、学習の目的に応じて選択することが重要です。表 2

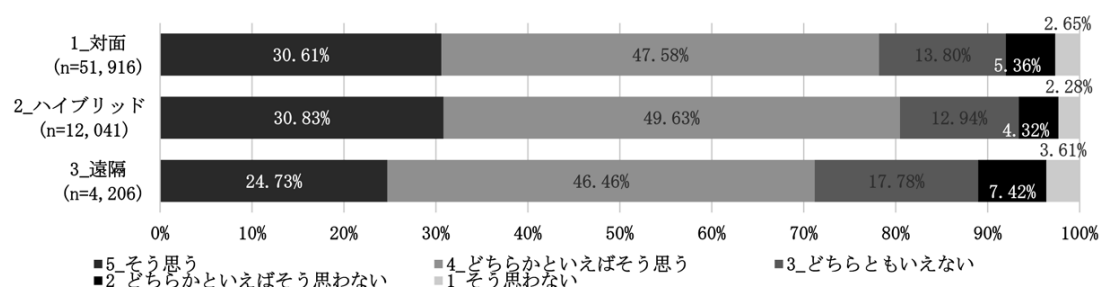


図 1 開講形態ごとの「授業理解度」回答分布

出所：長崎・大山 (2024) 図 2・3 も同様

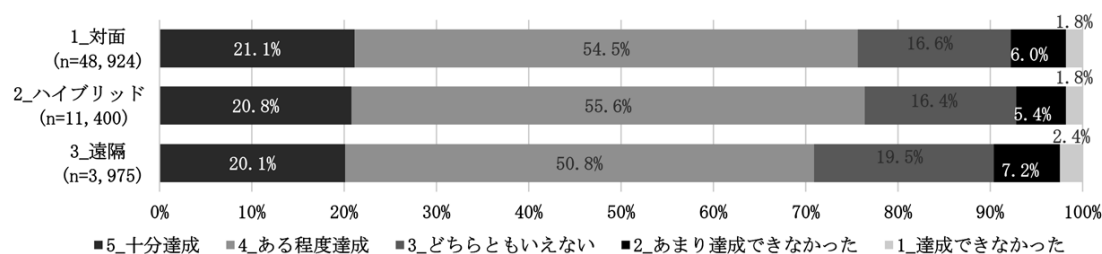


図 2 開講形態ごとの「到達目標の達成度」回答分布

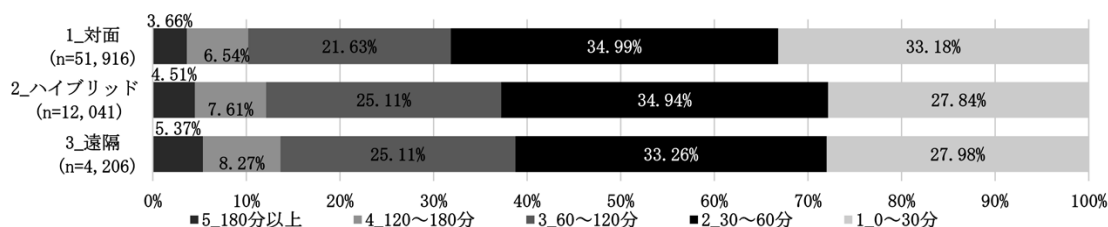


図 3 開講形態ごとの「自己学修時間」回答分布

に教員と学生視点におけるそれぞれの授業形態の特徴を示します。

2.2. 対面授業 — BYOD を活用した授業

2.2.1. BYOD を活用した対面形態の授業とは

対面形態は、これまで大学で主に実施されてきた通りの、教員と学生が同じ教室に集い、同じ時間を共有して行う授業形態です。これまで対面授業は、一斉講義や板書、口頭でのやり取りを中心に展開されてきましたが、近年は BYOD (Bring Your Own Device) の普及により、対面授業の中で可能な学習活動の幅が大きく広がっています。

表 2 授業形態ごとの特徴

	対面	ハイブリッド	遠隔
教員視点	授業デザイン (構想・準備) ・授業の流れを直感的に 構想しやすい ・学習者の反応を想定した 活動設計が可能	・対面の「臨場感」と遠隔の 「計画性」を組み合わせ設計 ・学習目標に応じてモードを選択	・教材・動画・資料を体系的に整理し やすい ・学習ログの活用を前提とした設計が 可能
	授業の実施 (運営・進行) ・学生の様子をみながら 即興的対応が可能 ・学生同士、学生と教員の 相互作用が実現	・対面では交流や議論を、遠隔では 反復や情報共有を行うなど、 目的に応じて分担 ・出張などのスケジュールへの対応	・時間や場所を問わず授業が実施でき る ・録画や配信により授業内容を共有・ 再利用できる
学生視点	学生への支援 ・その場で質問・助言が できる ・非言語的な理解支援が 可能	・対面での即時支援と、オンライン での継続支援の組み合わせ ・学生のニーズに応じた柔軟な支援 体制を設計	・LMSやチャットで個別対応が可能 ・記録に基づいた継続支援が しやすい
	学習経験 ・空間共有による一体感・ 偶然性が高い ・仲間との関係性を築き やすい	・対面の「つながり」と、遠隔の 「自律性・柔軟性」を統合 ・学生が自分に合った学び方を選択 できる環境づくりが可能	・自分のペースで学べ、反復・確認が 容易 ・移動や時間の制約が少ない ・顔が見えない方が促進されるコミュ ニケーション

BYOD とは、学生が自身のノート PC やタブレット、スマートフォンなどの情報端末を授業に持ち込み、学習に活用することを指します。大学全体で無線 LAN 環境や LMS、クラウドサービスが整備されたことで、対面授業においても、デジタル教材の活用、即時的な情報共有、記録の蓄積などが日常的に行えるようになっていきます。神戸大学では 2019 年から BYOD が始まっており、基本的に学生は授業にデバイスを持ち込むことができる状況にあります（大月ほか、2019）。

BYOD を活用した対面授業では、【紙のノートや配布資料に代わり、デジタル資料を参照しながら学ぶ・学生がその場で考えを入力・共有・可視化する・授業中の活動やメモが授業後の振り返りや復習につながる】といった学習の広がり生まれます。

一方で、デバイスに向かっていると、学生が授業以外の何らかの活動をデバイス上でこなっていても、教員はその状況を知り得ることが困難です。また、学生は重いデバイスを持参したにも関わらず、授業での活用に関する意図やその指示が不明瞭であると、学習意欲を失いかねません。そのため、BYOD を前提とした対面授業では、デバイスをどの場面で、どのような目的で使うのかを意図的に設計することが重要になります。

これまで、アクティブ・ラーニングを始めとして、対面授業における授業の工夫に関する知見はさまざまな場所で紹介されているので、本章では対面授業の中で、学生自身のデバイスをどのように活かすのかに焦点化し、BYOD によって拡張される学習活動や支援の可能性について整理し、授業デザインや実践に活かす視点を示します。

2.2.2. 神戸大学生の授業中のデバイス活用状況

神戸大学生は、現在授業中にどの程度デバイスを使用しているでしょうか。この調査は 2025 年の前期に授業中のデバイス活用状況について尋ねた調査で、主に教養教育の授業で

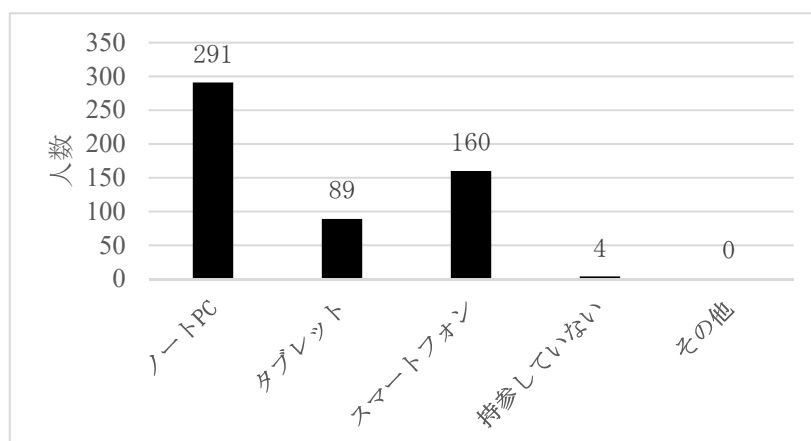


図 4 現在授業中に使用しているデバイス

実施しました。305 人の回答結果です。

まずは、授業中に使用しているデバイスの種類を見てみましょう（図 4）。こちらは複数回答の結果ですが、主に、ノート PC、タブレット、スマートフォンの 3 つに集約できます。305 名の回答中 291 名がノート PC を持ってきているという結果なので、ほとんどがノート PC を持参しているということがわかります。

図 5 には、ノート PC、タブレット、スマートフォンという各デバイスの授業中の使用用途を示しています。ノート PC とタブレットは機能が似ていますが、興味深いことに用途は少し異なっています。ノート PC の使用用途は、資料の閲覧、課題の遂行（作成から提出）、資料の検索の順で、その次にノートテイクがあります。一方タブレットでは、多くがノートテイクの用途で使用されていることがわかります。学生はこれまでの慣習であるノートにおける手書きのノートテイクをタブレット上でデジタルペンを用いて記入し、ノートテイクを行なっているのではないかと推察されます。以下に述べるインタビューから、学生がデジタルペンを使用するのは、これまで通りの手書きスタイルを維持しつつも、自分のノートを完全にデジタルで一括管理できることがメリットだと感じているようです。また、スマートフォンについては、資料検索の用途で使用されていることが目立ちます。教員からすると、「資料検索は画面が広くて、複数のページを同時に開けることができるノート PC の方が便利なのに」と思われるかもしれませんが、デジタルネイティブの学生は、普段操作が慣れているスマートフォンを使用する方が良いのかもしれない。

次に学生が実際に授業で、どのように自分のデバイスを使用しているのかについて、いくつかご紹介します。こちらは 2025 年 11-12 月に学生にインタビューを行った結果です。インタビューでは、【授業中に使用しているデバイスの種類・授業中のデバイスの典型的な使い方・BYOD に対して感じているメリットとデメリット】などを聞きました。ここでは典型例として 3 名の結果をご紹介します。表 3 にその一覧を示します。

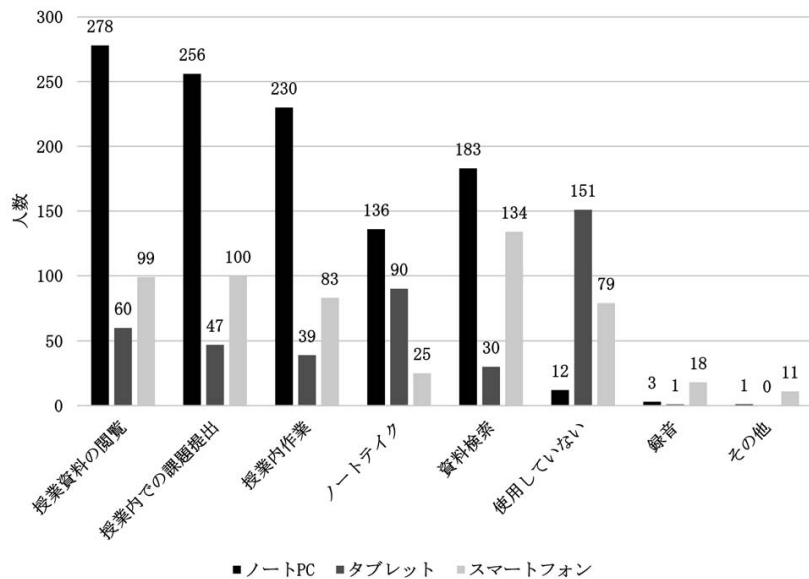


図5 授業中に使用している各デバイスの用途

インタビュー結果から、学生の授業中のデバイス利用は、①紙への手書きでノートを構成するタイプ、②デジタル端末上で資料を再構成するタイプ、③紙への手書きとデジタルを併用するタイプの三つに整理できます。いずれのタイプにおいても、学生は自身の学習特性や試験準備を見据えてデバイスを使い分けており、画一的な活用を前提としない授業デザインが重要であることが示されました。詳しいエピソードは web 版をご覧ください。

2.2.3. 学生のデバイス利用を活かした授業デザインのポイント

学生は、授業中にノートテイク、資料閲覧、情報検索、成果物作成など、さまざまな目的で自身のデバイスを活用しています。本調査およびインタビュー結果からは、学生が一般的な方法でデバイスを使用しているのではなく、それぞれの学習特性や授業内容に応じて使い分けている実態が明らかになりました。こうした状況を踏まえると、授業デザインにおいては、特定の使用方法を前提とするのではなく、次のように学生の多様なデバイス利用を包摂する枠組みを用意することが重要です。

第一に、授業中に生じる学習成果や思考過程を可視化し、教員と学生の間で共有できるようにすることが求められます。クラウドサービス（例えばGoogle スライドなど）を用いることで、学生の記述内容や途中経過を即時に提出・確認することが可能となり、理解状況に応じたフィードバックを行いやすくなります。これにより、学生は自身の理解を振り返りながら学習を進めることができます。

第二に、授業中の理解のずれや疑問点をその場で調整できる仕組みを設けることが重要です。簡易なアンケートやコメント機能などを活用することで、学生は発言しづらい内容

表 3 授業中のデバイス使用に関するインタビュー結果

所属	A : 工学部 4 年生	B : 国際人間科学部 4 年生	C : 医学部 1 年生
デバイスの 種類	・ノート PC (Windows/ThinkPad) ・スマートフォン	・ノート PC (Surface) ・iPad (iPad Air) ・デジタルペン ・スマートフォン	・ノート PC (Windows/HP) ・スマートフォン
デバイスの 使い方	・PC で資料閲覧 + 検索 + (紙ベースの演習とノートテイク)	・PC で資料閲覧 + iPad で資料を転写 + デジタルペンで書き込みしてノートを再構成	- PC で資料閲覧 + スマホで検索 + PC で PDF に書き込み + (紙ベースのノートテイク)
BYOD に対する メリット	・印刷が不要 ・独自に整理が可能 ・授業資料の事前ダウンロードが可能	・授業に関する情報の集約 ・忘れ物の防止	・資料参照が容易
BYOD に対する デメリット	・持ち運びが重い ・電源の持ちが悪い	・2 台運搬が重い ・電源の持ちが悪い	・大教室の wi-fi が弱い ・通知による誘惑 ・バッテリー不足
情報の整理	・端末に保存	・iPad フリーボードに保存 ・Google ドライブに保存	・端末に保存

も含めて意思表示がしやすくなり、教員は授業の進行を柔軟に調整することができます。このような双方向的なやり取りは、対面授業における ICT 活用の意義の一つです。

第三に、授業内外で得られた学習成果を蓄積し、後の学習や振り返りに活用できるようにすることが望まれます。学生が作成したノートや資料、課題などをデバイス上に整理・保存することで、試験準備や継続的な学習につなげることができます。これは、学習の断片化を防ぎ、学習経験を積み重ねていく上で有効です。

以上の三点は、学生の多様なデバイス利用を前提とした授業デザインの基本的な考え方として整理できます。具体的なツールや運用方法については、授業目的や学生の状況に応じて選択することが重要であると考えられます。

2.2.4. 「やりすぎない」BYOD 活用のための注意点

BYOD を前提とした対面授業では、デバイスを「使わせること」自体が目的にならない

よう注意する必要があります。デバイスはあくまで学習を支援する手段であり、授業のねらいや学習活動と結びつかない使用は、かえって学習の妨げとなる場合があります。そのため、授業内でのデバイス使用は、学習目標や活動内容に照らした活用を設計することが重要です。

また、教員が複数のツールやアプリケーションを頻繁に切り替えることは、学生の認知的な負荷を高める要因となります。特に対面授業では、教員の説明、配布資料、板書、デバイス画面など、学生が注意を向ける対象が増えやすくなります。使用するツールや機能はできるだけ限定し、学習内容への集中を妨げない構成とすることが求められます。

さらに、学生のデバイス利用の仕方や学習スタイルは一律ではなく、使用機器の種類や操作への習熟度にも差があります。加えて、通信環境や端末トラブルなどの問題が生じる可能性も考慮して、もしもの場合の代替手段を考えておく必要があります。こうした前提を踏まえ、特定の操作やツールの使用を一律に求めるのではなく、複数の選択肢を用意するなど、柔軟な運用を行うことが望まれます。

以上より、対面形態のBYOD活用においては、①デバイス使用を目的化しないこと、②認知的負荷を抑えたツール設計を行うこと、③学習者の多様性や環境差を前提とした柔軟な運用を行うことの三点が、基本的な留意点として整理できます。

2.3. ハイブリッド（対面）・（遠隔）形態の空間と時間をつなぐ授業デザイン

2.3.1. ハイブリッド形態とは

ハイブリッド形態とは、1つの授業科目において、対面と遠隔それぞれの特性を組み合わせ、学習目的や学生の状況に応じて選択し、学びをデザインできる授業形態です。

対面の特性である対話性や臨場感と、遠隔の特性である柔軟性・反復学習の利点を活かすことで、学生の多様な学習を支え、より深い学びを促進します。

【例】 Semester制（15回授業）の場合

- ・ 10回分を対面、5回分を遠隔（オンデマンド）で実施 → [ハイブリッド（対面）]
- ・ 4回分を対面、11回分を遠隔（オンデマンド）で実施 → [ハイブリッド（遠隔）]

ハイブリッド形態は、対面と遠隔のそれぞれの特徴を活かして授業を実施できる点が特徴です。ただし、学生に対面授業と遠隔授業の予定をあらかじめシラバスで明示しておくことが重要です。また、授業計画に変更が生じた場合には、「最新情報はBEEF+を参照すること」などと掲示しておくことで、学生の混乱を防ぐことができます。

2.3.2. ハイブリッド形態の授業デザインのポイント

①対面授業を基本にしつつ、事前学習をオンデマンド動画で行う（反転授業型）

授業における「知識理解」や「基礎的な説明」を遠隔によるオンデマンド動画で事前に学習し、対面授業では応用・実践・ディスカッション等に重点的に時間を充てる形式です。

【特徴】

- ・ 知識獲得において、学生が自分のペースで理解を補うことができるため、基礎的内容の理解不足を軽減できる
- ・ 対面の時間を、学生同士あるいは教員との対話など、集合して行うことに意義のある学びに集中させることができる
- ・ 知識を獲得した上で対面授業に臨むため、議論が活性化し、学習者同士の相互作用が促進される

【授業デザインの留意点】

- ・ 事前学習の目的を明示する
→ 動画視聴自体が目的にならないよう、「次回の対面授業で活用する知識」「課題の前提となる内容」などを明確に示す。
- ・ 動画学習と対面授業の内容を明確に結びつけた構成とする
→ 事前学習の内容を活用する場面（ディスカッションや演習等）を意図的に設定する。
- ・ LMS で教材を一元管理する
→ 動画、確認テスト、配布資料等を同一の場所にまとめて学習の連続性を確保する。

【授業実施の留意点】

- ・ 事前学習を実施していることを前提として授業を進行する
→ 授業冒頭にミニクイズやチェックテストを行うことで視聴状況や理解度の確認ができる。
- ・ 対面授業において説明中心の時間を増やさない
→ 対面は「議論」を伴う学生同士／教員との相互作用のワークに集中する。
- ・ 動画を視聴していない学生への代替策を用意する
→ 当日の簡易的な要約資料の配布やペアでの説明活動等により補完する。ただし、事前学習の重要性を継続的に促すようにする。

②遠隔授業を基本とし、学期中に数回は対面でワークショップを行う

普段はオンラインで講義、資料閲覧、課題を進め、必要な場面（ワークショップ、実技、プレゼン、グループ形成など）のみ対面で実施する形式です。

【特徴】

- ・ 学生の移動に伴う負担を軽減しつつ、対面でしか得られない交流・体験を補強できる
- ・ オンラインでは自分のペースでインプットを行い、対面回ではアウトプットの共有を中心とした活動を行うことができる
- ・ 分散キャンパス、留学生、遠方からの通学者、実習との両立等、多様な学習状況にある学生の学習継続を支援できる

【授業デザインの留意点】

- ・ 対面回で実施する活動内容を明確に設計する
 - 共同作業、成果発表会等、「対面で行う必然性」を持たせた活動にする。
- ・ オンライン回と対面回とのつながりを意識した構成に設計する
 - オンラインでのインプット、対面でのアウトプットの共有、振り返りの共有という一連の流れにする。
- ・ 対面回スケジュールを早期に共有する
 - 分散キャンパスの学生や実習等の調整がしやすいように配慮する。
- ・ オンライン部分における学習の管理をする
 - 対面回の授業の充実化を図るためにも、オンライン部分で単に動画を視聴するだけでなく、学習を確認するような仕組み（締め切りがある課題や掲示板での投稿など）をあらかじめ課しておき、学習の積み重ねを実感させる。

【授業実施の留意点】

- ・ 対面回では交流づくりを実施する
 - オンライン中心の場合、学生同士が初対面で関係性が弱くなることもあるため、対面時に簡単なアイスブレイクを実施する。
- ・ ワークショップの指示を正確・簡潔に示す
 - 対面は時間の流れが早いため、議論の時間などは随時時間を示しながら実施する。

このように、ハイブリッド形態の授業デザインにおいては、①対面回と遠隔回それぞれの役割を明確にし、学習活動の位置づけを整理すること、②対面と遠隔を単に並置するのではなく、学習の流れとして有機的につなぐ構成とすること、③学生が授業全体の見通しを持てるよう、シラバスや LMS を通じて計画や最新情報を明示することが、基本的な留意点として挙げられます。これらを踏まえることで、対面と遠隔の特性を活かした柔軟で一貫性のある学習環境を設計することが可能となります。

2.4. 遠隔 — 非同期で持続的な学びを支える授業デザイン

2.4.1. 遠隔形態とは

遠隔形態は、1つの科目において 神戸大学では原則としてオンデマンド形式で授業を実施する授業形態です。学生は、受講場所や時間を自分の都合に合わせて選択でき、学習機会を柔軟に確保することができます。また教員側も、資料・動画の作成や課題設計を計画的に行えるため、授業準備を効率的に進めることが可能です。

一方で、オンデマンド中心の学習は、学生の自主性や計画性に大きく依存する側面があります。課題管理や学習の見える化を十分に行わないと、学習が途切れ理解が浅くなる可能性もあります。そのため、教員は 学習のペースを支える仕組みや継続的に学びを促すデザインを意図的に組み込む必要があります。

2.4.2. 遠隔形態の授業デザインのポイント

遠隔形態は、時間や場所にとらわれずに学習できるという利点がある一方で、学生の学習状況を把握しにくく、学習への関与が弱まりやすいという課題もあります。そのため、遠隔授業を設計する際には、対面授業とは異なる特性を踏まえた工夫が必要です。

第一に、遠隔授業では、学習内容や活動の目的を明確に示すことが重要です。特にオンデマンド型の授業時には、学生が自分のペースで学習を進めることになるため、各回のねらいや到達目標を明示し、何を意識して、いつまでに学習すればよいのかが分かる構成とすることが求められます。これにより、学習の見通しが立ちやすくなり、学習への主体的な関与を促すことができます。

第二に、動画教材や資料は、内容や目的ごとに短く区切って提示することが望まれます。長時間の動画は集中の維持が難しくなるため、学習内容を整理した上で、必要に応じて複数のコンテンツに分割することが有効です (Guo et al., 2019)。また、動画視聴だけで完結させるのではなく、簡単な課題や問いを組み合わせることで、理解を確認しながら学習を進められるようにすることが重要です。

第三に、遠隔授業においても、学生が学習過程や成果を外化し、振り返る機会を設けることが重要です。小テストやコメント記入、簡単なレポートなどを通して、学生自身が学習内容を整理するとともに、教員が学習状況を把握できるようにすることで、双方向性を補うことができます。2.3 に示したハイブリッド形態の遠隔部分の工夫や留意点も併せて参照してください。

このように、遠隔授業では、①学習の見通しを明確にすること、②短く目的を絞った教材を用いること、③学習過程や成果を可視化する仕組みを組み込むことが、基本的な設計の考え方として整理できます。具体的なツールや運用方法については、授業の目的や学生の状況に応じて選択することが重要であり、詳細は Web 上の教育支援コンテンツで紹介しています。

3. おわりに

本稿では、神戸大学における授業形態の多様化を背景として、対面・ハイブリッド・遠隔の三つの授業形態を横断的に整理し、それぞれに適した授業デザインや学習支援の視点を体系化した教育支援コンテンツの構築の内容について報告した。学内で蓄積されてきた授業振り返りアンケート、BYOD 実態調査、授業実践の知見を基盤とすることで、各授業形態の特徴や課題を比較可能な形で可視化し、教員が授業デザイン時に参照できる教育支援コンテンツとして整理した点に、意義があると考えられる。

長崎・大山 (2025) によると、対面とハイブリッドは学生の理解度や到達目標達成度において概ね同等の傾向を示す一方、遠隔授業では理解度がやや低い傾向が確認されている。また、BYOD を前提とした対面授業においては、学生が自身の学習特性に応じて、多様な

デバイスやノートテイクの方法を使い分けている実態が明らかになった。これらの結果は、授業形態や ICT 活用の有無そのものが学習の質を一義的に規定するのではなく、各授業形態の特性を踏まえた授業デザインや学習支援の在り方が重要であることを示唆している。

本稿で構築した教育支援コンテンツは、特定の授業形態を推奨するものではなく、教員が授業目的や学生状況に応じて適切な設計判断を行うための参照枠として位置づけられる。対面・ハイブリッド・遠隔の三形態を単なる「実施形態の違い」としてではなく、授業デザイン上の特性の違いとして整理した点に特徴がある。また、本稿では割愛されているが、Web という媒体を用いることで、図表や事例、Q&A などの実践的情報を継続的に更新・共有できる点も、教員の授業改善を支援する上での利点である。

今後の課題としては、本コンテンツの学内外での活用状況を把握し、教員の授業改善や学生の学習経験にどのような影響を与えるかを検証していくことが挙げられる。あわせて、動画コンテンツの拡充や他大学との比較を通じて、授業形態の多様化に対応した教育支援の在り方をさらに検討していく必要がある。

参考文献

- Guo, P. J., Kim, J., & Rubin, R. (2014). How video production affects student engagement: An empirical study of MOOC videos. *Proceedings of the First ACM Conference on Learning @ Scale Conference (L@S 2014)*, pp. 41–50.
- Hodges, C., Moore, S., Lockee, B., Trust, T., & Bond, A. (2020). The difference between emergency remote teaching and online learning. *Educause Review*.
(<https://er.educause.edu/articles/2020/3/the-difference-between-emergency-remote-teaching-and-online-learning>) 最終閲覧日:2026 年 1 月 15 日
- 文部科学省 (2011) 「大学における教育内容等の改革状況等について (平成 23 年度)」文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室
(https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1341433.htm) 最終閲覧日:2026 年 1 月 15 日
- 長崎英助・大山牧子 (2025) 「授業形態ごとの学生の振り返りアンケート結果の分析-自己学修時間・授業理解度・達成度の比較を通して-」『神戸大学大学教育研究』第 33 号, pp.81-98.
- 大月一弘・齋藤政彦・熊本悦子・殷成久 (2019) 「LMS の高度化と学修データ統合システムによる学修者本位の教育の実現—神戸大学 Plus-DX 取組みの紹介—」『大学教育と情報』第 3 号, pp.4-5.
- 大山牧子 (2024) 「授業評価アンケートの自由記述結果に基づくオンライン授業のデザイン」『神戸大学大学教育研究』第 32 号, pp. 115-129.